

終章

聖徳太子伝に関して久米邦武が唱えた、キリスト教七世紀渡来説は、これまで興味ある仮説の域を出ないと言われてきたが、それを補強する試みもなかったわけではない。中西進は、クリスマスも大嘗祭も冬至の祭りであることについて、「すでに四世紀にできあがっていたキリスト誕生の神話が、七世紀の日本にやって来なかったとは、誰も言えないだろう」（中西「一九九四」二五六頁）と指摘しており、この著書のタイトル『キリストと大國主』に込められたキリストと大國主の死と復活についても同様であろう。貨幣についての一般的な考察をふまえて日本古代の銀貨について検討することを足がかりとして、中西が反証できないとしたキリスト教七世紀渡来説をより積極的に実証することを試みてきた。

中西は、自宅近くのアメリカ風ステーキ店にポーランド人教授一家が入ったとき、出された生ハムの味をポーランドの生ハムと同じだと教授夫人が言ったのに対して、店のマスターが「シカゴ風の味です」と答えたところ、教授が「昔ポーランド人がたくさんシカゴへ行きました」と謎解きをしたのを手がかりに、ポーランドのような「決して国家規模の大きな国ではない」「貿易なども目立たない」国からの、「見えざる旅人」が古代以降の日本にもたえまなくやってきたことを、この著書の「はじめに」で論じており、七世紀の日本にキリスト教を伝えたのも、ポーランドのように見過ごされがちな小国からの「見えざる旅人」であるとの直観的予想を抱いていたと思われる。ドウヴァーラヴァティーから漂着した西方系インド人^{ヴァナ}という、ここで示した答えは、それを証していると言えよう。

これまでの考察から、七世紀後半の日本には、かなり正確なキリスト教の教義が入ったと思われ、ローマ帝

国出身者の多かったインド経由だとすれば、一般信徒用のシリア語新旧約聖書『ペシット(Peshito)』(スチュアート「一九七九」附録Bを参照)かもしれない。したがって、ほぼ確実に六六一辛酉年には日本にもADが伝わっていたと思われる。辛酉革命説そのものは則天武后に仕えたインド人暦学者が案出したと考えられるが、斉明崩御年とAD元年とが同じ辛酉であるということ自体は、天智・天武ともに知っていたと思われる、そのほかに、ポテント十字と「田」やT十字と「丁」の一致も重なったため、両親の供養に欠かせない宗教としてキリスト教に帰依し、母崩御・白村江敗戦後の国難を救った舍衛女性の教えを真実だと確信したに違いなからう。

百済においては舍利供養は弥勒菩薩のいる兜率往生の要件とされ、それは弥勒下生という一種の終末観とながっている(大西「二〇〇二」二〇四―五頁)。そのような信仰は容易に、『新約聖書』の終末・キリスト再臨説と習合しえたと思われる。川原寺や崇福寺の五重塔は仏教とキリスト教の習合した復活・終末思想の所産であつただろう。死期の迫つた天武が六八六年七月二〇日に定めた年号朱鳥(あかみとり)も、キリスト復活の象徴とされ、コンスタンティヌス期以来キリスト教美術でとりあげられたフェニックスと解釈できる。古代ギリシア・ローマ文明が自らの霊鳥と融合させてキリストを受け入れたことと、古代東アジア文明が一光三尊像とキリスト教とを融合させたこととの間に、どれほどの差異があるのか？

神武紀元をADからさらに六六〇年遡らせることも、兄弟のいずれかが、母の崩御年を記念すべく、考えついたものであろう。つまり、斉明・天智・天武の母子や百済王善光は、舍衛女性に入門した日本初の仏基融合教徒であり、善光寺信仰という形でそれが今日まで伝えられる基礎を固め、彼らのキリスト教信仰は、西方キリスト教とは異なつて、仏教や日本古来の神々への信仰を排除するものではなかつたと思われる。それどころか、善光は日本に仏教を伝えた百済王家のお墨付きを舍衛女性に与えて庇護したのである。

本尊が秘仏とされたこと自体に、一神教特有の偶像崇拜忌避が影響している可能性もある。七世紀までの東ローマ・コインには皇帝像や神像がみられるが、机銀貨には天皇像も神像もみられず、十字印が多いのは、西南インドのネストリウス派が十字以外の形象をあまり用いず、偶像崇拜を排除する傾向が強い（スチュアー ト「一九七九」一五一頁、Gillman and Klimkeit [1999] pp. 174, 183）¹⁾とも符合する。

大秦景教流行中国碑には、経像がもたらされ、皇帝の写真（肖像画）を寺壁に掲げたとあり、ソグディアナ・トルファン・敦煌でネストリウス派の聖像が発見されている（Gillman and Klimkeit [1999] Plate 19-25, 28-9）。このように、シルクロード・中国のネストリウス派に偶像忌避は希薄である。机銀貨が肖像を欠き、善光寺本尊が秘仏として姿を隠したことも、シルクロード・中国系よりも偶像を厳しく排除する西南インド系キリスト教が伝来した証しといえよう。

善光寺巡礼・戒壇巡廻はメッカ巡礼・カアバ神殿巡廻に似ており、いずれも、神仏像を見えなくしたこの世の直方体至聖所を巡る宗教行動である。古来、カアバ神殿には数多くの神像が奉納されていたが、六三〇年のメッカ征服・偶像破壊によって、唯一の神に捧げられた神の館とされて以降、イスラム教徒の尊崇を集めた。仏像を見えなくすれば神像なきカアバ神殿と同様、偶像崇拜を回避できるという理由で、あるいは舎衛女性が一光三尊像に対してマホメットのごとき偶像破壊をする気になれなかったため、代替措置として本尊厨子を納めた宮殿に御戸帳が懸けられることになったのではなからうか。実際にカアバ神殿や、その原型である会見の幕屋ないし宿り場（『出エジプト記』）をモデルにした可能性も指摘できる^①。神の館である以上、神像ならぬ本物の神がカアバ神殿のなかに住むとされるのであり、厨子内の善光寺本尊も（単なる）仏像ではなく生身如来とされている。このように、善光寺信仰は、日本人にとって異質とされてきたユダヤ教、キリスト教やイス

ラム教といった一神教の伝統を今日まで濃厚に伝えてきたのである。

イエスⅡ善佐Ⅱ子なる神に対する信仰は、日本における讓位・幼帝の伝統（平山「二〇〇五c」を参照）形成にも影響したと思われる。最初の讓位は六四五年乙巳の変の際、皇極が子息（のちの天智）に讓位しようとし、中臣鎌足の進言で同父母弟孝徳への讓位となったが、孝徳崩御後も天智即位は実現せず、自ら重祚しているのだから、天智への讓位は彼女の生前かなえられなかった悲願の一つであり、その願いが、子なる神を父なる神や母なる聖霊よりも強調するキリスト教への彼女の信仰の底に流れるものであったと思われる。

そして、天智の娘で天武の皇后であった持統が、一五歳の孫文武に讓位した際には、斉明のキリスト教信仰がまだ彼女の子孫達の間で風化していなかったことがそのような前例のない皇位継承を支えたのかもしれない。しかし、大宝二（七〇二）年、三二年ぶりに遣唐使が派遣されて中国文明直輸入が再開され、文武崩御翌七八年に和銅改元とセットで開元通宝を範とした和同開珎が発行されるという情勢のなかで、受容すると決めた中国文明の圧倒的な権威の圧力と、世代交代の進展によって、帆銀貨や富本銭の記号、日本国号や神武紀元に非中国的・キリスト教的含意があり、日本は仏基融合教国であったということ、正史など文字記録から抹消され、しだいに忘れ去られていったものと思われる。

『善光寺縁起』において「代々皇帝御安置之次第」が文武天皇まで記してあることは、文武崩御翌年の和銅改元・和同開珎発行と見事に照応しており、天智以来の銀貨の歴史を封印すること、善光寺本尊を核とする皇室のキリスト教信仰を隠蔽することが、中華標準文明の採用と同時に並行的に生じたことを反映していると説明できる。長屋王の変が、キリスト教的要素を異端として排除する決定的な出来事であり、おそらくシリア語文書であった『新字一部四十四卷』も平安期には解説不能となり、散逸してしまった。

善光寺がその由来を欽明朝における仏教公伝に結びつけるのは、科野氏と百済との関係や、滅亡した百済王家を日本で継承した善光の関与からして自然なことであろう。しかし、『日本書紀』が最初に「銀銭」に言及するのが、仏教公伝よりはるか以前のこととされる顕宗天皇二年一〇月六日条であるのは、天智の手によって東南アジア規格に従いキリスト教的記号を使用した銀貨が発行され、天武も十字や三位一体を漢字に込めた銅銭Ⅱ富本銭を発行したという史実を葬り、伝説的な過去の黄金時代から発行主体不明の銀貨がすでに存在していたとするような、意図的な隠蔽工作であるように思われる。そのことと、皇室の尊崇篤い善光寺本尊が都から追いやられ、阿弥陀三尊とキリスト教の融合した教えが国教であったことが隠蔽されたことが、一連かつ不可分の出来事であることは、道慈が『日本書紀』述作にかかわっていることから、示唆される。両者は、成立時にも歴史から抹消される際にも、表裏一体であったことになる。

しかし、意識の表面において忘れ去られたことが、歴史の方向を長期間規定し続けるということが、この場合にも成り立つ。道慈が一光三尊像を大安寺、さらに難波から排除したのではないかと論じたが、その道慈が律師を辞して間もない天平一二（七四〇）年二月、河内国知識寺を訪れた聖武は、知識によって造像された盧舍那仏をみて、「朕も造り奉らむ」と決意し（『続日本紀』天平勝宝元年二月二十七日条）、道慈らによって異端視されてきた行基を重用して造立が進められた。盧舍那仏は、道慈が追放した一光三尊像の欠を埋めるべく、皇室信仰の拠り所として求められたという面があるろう。

陸奥守百済王敬福が同国小田郡の黄金を献上して大仏鍍金が始められ（『続日本紀』天平二年四月一日条）、同年四月八日から、盧舍那仏脇侍として、尼信勝によって東（大仏の左）に観音、尼善光によって西（大仏の右）に虚空蔵の金色両菩薩像が造り始められた（『東大寺要録』巻七 雑事章第十）。そして、同年四月一四日

に、金の献上を祝って天平感宝と改元されている。敬福は百済王善光の曾孫であり『続日本紀』天平神護二年六月二十八日条)、尼善光も百済系帰化人・信濃人とながりのある貴族出身者と思われる(坂井「一九六九」八七頁)、舍衛女性を開祖とし、のちに大本願尼上人となるような、善光寺の核となる女性聖職者ではなからうか。

このように、善光寺を担う人々が東大寺大仏の黄金と金色脇侍を提供した際には、大安寺から排除された黄金製一光三尊像の再興として東大寺大仏を完成させる意図があっただろう。敬福は天平一五(七四三)年六月三〇日に陸奥守となり、同一八(七四六)年四月四日上総守に転任して日が浅いにもかかわらず、同年九月一四日陸奥守に再任された。そして、天平一八年一〇月六日に、東大寺大仏造立地である金鐘寺に元正太上天皇・聖武天皇・光明皇后が行幸して盧舍那仏燃燈供養が盛大に行われている(いずれも『続日本紀』当該日条)。これらのことから判断して、最初の陸奥守のとき以来、敬福は金鉦開發を手がけており、おそらく有望な鉦脈が発見されたため、転任して間もないにもかかわらず急遽陸奥守に復し^②、金鉦脈発見を祝って盧舍那仏燃燈供養が企画されたのであろう。自分たちが見出した黄金で、大仏と両脇侍の三尊を一体として光り輝かせたいということは、日本最古の仏像とされる一光三尊像を畿内から放擲された百済王家にとつて、名誉回復を賭けた大事業であつたと思われる。そして、天平二二年四月一日の東大寺行幸の際、敬福は大仏の前で従五位上から従三位に異例の昇進を賜った。

金産出・献上は天平二一(七四九)年二月二日であつた。天平二一年は長屋王の変の二〇年後であり、さらに、二月二日は長屋王の忌日の十日後で、天平八年ころから光明皇后らによつて長屋王と同一視されるようになったと思われる聖徳太子の忌日とされた日(『日本書紀』による忌日は二月五日)であることからして、東大寺大仏建立は長屋王Ⅱ聖徳太子Ⅱキリストを祀るためのものであつたこともわかる。

盧舎那仏は太陽神に由来し、その右の虚空蔵菩薩は金星を化身とし、盧舎那仏と虚空蔵菩薩、太陽と金星は、父と子を暗喩するにふさわしいのみならず、キリスト受難日が金曜であることも、虚空蔵菩薩とキリストを同一視する要因となろう。のちに空海が金星・虚空蔵菩薩と特別な関わりを持ち、室町時代に定型化された十三仏信仰・十三仏事の主導に、大日如来（大盧舎那仏）を抑えて虚空蔵菩薩が位置するに至った（県「一九八五」を参照）ような、日本仏教における虚空蔵信仰の強さの秘密は、東大寺三尊や大日・虚空蔵信仰にも三位一体との習合が保存され、年忌仏事とキリスト復活信仰とが習合した結果と理解すればよいのではなからうか。

貨幣経済・市民社会について言えば、日本史上最も独裁的な天皇とされる天武ですら、天武一二（六八三）年四月一五日の、銀貨使用停止の詔が引き起こした混乱を収束するため、三日後には銀流通停止を諦める詔を出さざるをえなかった。このことは、当時早くも首都およびその周辺の貨幣経済が専制的権力者の恣意に従わない自律性を獲得していたことを証している。

和同開珎を日本最初のコインとする旧来の説においては、律令政府がコインの交換手段としての流通を実現するために蓄銭叙位令などのさまざまな策をとったものの、長続きせず、流通経済の未熟ゆえやがて皇朝十二銭は廃れたとする。しかし、蓄銭叙位令はコインを交換手段として普及させるためではなく、和同開珎が交換手段として使われだしたが価値保蔵にはあまり使われないため、流通速度が高く増発がインフレを招くという問題を解決し、価値保蔵手段としての用途を開発したのが蓄銭叙位令であり、皇朝十二銭が廃れたのも、流通経済の発達とともに銭貨需要が増大したにもかかわらず、銭貨の原料となる銅の供給が確保できなくなったため、米や絹といった銭貨以外の交換手段との競争に銭貨が敗れたに過ぎず、渡来銭が入ってくるようになると急速に普及する素地は机銀貨以来の貨幣経済・市民社会の発展によって用意されていたのである（平山「二〇

〇八」を参照)。

和同開珎のモデルともされた唐の開元通宝は、同時代の琉球でかなり流通しており(今村「二〇〇一」二二〇(一頁を参照)、もしも畿内で東南アジア規格による銀貨が発行され流通していなければ、律令政府が開元通宝を排除して皇朝十二銭を発行することは困難であつたと思われる。そもそも、机銀貨発行による国防体制整備がなければ、日本は唐に占領され、開元通宝流通域となり、それ以後も中華文明圏に従属しつづけたのではなからうか。また、律令政府の財政は新貨発行差益に大いに依存していたと思われる。その歴史を抹消しようとした机銀貨の遺産である、巨万の富を生み出す貨幣経済に寄生することで、中華帝国から独立した国家が存立し、日本の文化や社会の古典となるものも成長しえたと言うこともできよう。

このように、天智が発行した銀貨は、亡き斉明女帝の靈威のおかげで強大な権力に頼ることなく流通して、日本には開元通宝流通圏とは別の本格的な貨幣経済が誕生したのである。そしてそれは、東アジアの中華標準とはかなり異なり、西洋に近い面をかなり持つような、日本独自の社会・経済・政治システム形成を根底で支えたと思われる。古代における日本独自の貨幣経済は、中国経由の由緒正しい仏教に押しつぶされることなく善光寺や東大寺が日本を代表する寺院として存続し、終身在位の専制君主という中国皇帝の正常なあり方に反して讓位・幼帝慣行が維持され続けたこととパラレルで、相互補完的なものであつたと思われる。

唐伝来の正統仏教から異端視され、東国に排除された善光寺は、民俗と結び付いた庶民信仰として日本に根をおろすとともに、京からかなり自立した東国政権を正統化し、その成長を促す役割を果たした。定尊の善光寺秘仏本尊拝見・模造仏鑄造のあつた建久六(一一九五)年は頼朝が征夷大將軍となつて鎌倉幕府が開かれた建久三年の直後、源延の拝見は承久乱直前である。このことからして、秘仏を見て写すことが、源家や北条氏

による、前例のない武家政権形態を正当化する意味を有していたと思われる。熱田出身の定尊は頼朝の五・六歳年少の母方交叉いとこ（母の兄弟の子）であり（坂井「一九六九」七八〇―二頁）、源延は頼朝に挙兵以来仕えた加藤景員の子であった。彼らの幕府との縁故は、幕府の支持のおかげで彼らが秘仏を見ることができたことを窺わせる。

定尊が秘仏を拝見して模造を作ったところ頼朝も善光寺参詣を志していたことは、『吾妻鏡』建久六年八月二日・同二三日条に記録されており、頼朝や幕府要職者たちの善光寺信仰が関東の武門に広まった（石村「一九七〇」二七頁）。定尊が善光寺秘仏本尊を拝見してから、秘仏をコピーした善光寺式一光三尊像鑄造がはじまり、東国を中心として各地に、秘仏のコピーを安置する新善光寺が出現した。新善光寺は、街道筋など交通の要衝に建立されることが多く、中世における貨幣経済・市民社会の成長と東国の地位向上を象徴するものであった。

中世の関東を中心として昂揚した善光寺信仰は、頼朝や幕府要職者とその俗縁に連なる僧に発するが、少なくとも下級武士層に広まったことは間違いない。一二二〇年代ころ武蔵国で作られはじめた初発期板碑のなかに光背を彫りくぼめて三尊を浮き彫りにするという極めてユニークな一光三尊像が多く見られ、それらを作ったのは農村の在地領主たる下級武士で、彼らの信仰には他と異なった強烈な独自性がみられたと思われる（鶴岡「一九七三」を参照）。唐直輸入の正統仏教によつて畿内から追われ、東国に落ち着いた善光寺本尊が、鎌倉幕府草創期に秘密のヴェールを脱ぎ、特異な图像表現を顕わすことによつて、唐天竺や京都の正統的な発想にとられない自由な気風が鎌倉期東国武士たちの間に育まれるのを大いに助けたのである。

天下統一を果たした豊臣秀吉は、善光寺本尊秘仏を、大仏殿崩壊後再興した京都方広寺の本尊に迎えたが、これは、東国の徳川氏から善光寺本尊を切り離し、中央集権を強化する狙いを伴うものであったと思われる。

しかし、秀吉が病に倒れると善光寺本尊を京都に移した祟りであるとする流言などのため信州に本尊を帰すことにし、本尊が京都を發した翌日に秀吉は薨じた（以上、坂井「一九六九」第五篇第五章を参照）。善光寺本尊の信州還座は豊臣政権崩壊の端緒であるとともに、より分権主義的な家康が東国に幕府を開く伏線ともなった。このように、京の朝廷と関東の幕府という二元的な権威・権力構造が形成され維持される際に、中国伝来の正統的仏教とは異質な善光寺信仰が東国を中心に根付いていたことが、少なからぬ役割を果たしたと思われる。そして、朝廷と幕府や西国と東国の二元性^③こそが、日本社会において専制的権力の形成を抑止する伝統を支えた根本的な条件であり、そこから日本における近世・近代市民社会も進化してきたと言える。

注

① ネストリウス派カトリコス（イシヨヤフ）二世がマホメットと会見して種々の特権を手に入れたと伝えられているように、ネストリウス派はイスラム教徒とほぼ同等の権利を有し、両者の関係は極めて良好であり、医師・技術者・学者として重用され、ギリシア語文献の翻訳をはじめ、イスラム文化に貢献した（森安「一九七八」二三八―九頁を参照）。また、初期のイスラム教徒は、アミダの聖トマス聖堂など、中東のキリスト教会を共同使用していた。このように、中東において支配的なキリスト教であったネストリウス派と初期イスラム教は緊密な関係にあったので、イスラム教の知識がインド、さらには日本まで伝えられたとしても不思議ではない。

② 敬福に代わって陸奥守となっていた石川朝臣年足が、天平一八年九月一四日に敬福が再任された直後の同月二〇日に春官員外亮となつていることも、敬福の陸奥守再任が異例の緊急人事であったことを示唆する。

③ 室町幕府は東国ではなく京にあったが、関東の独自性は鎌倉府・関東公方の存在として残されており、四代將軍義持による皇位篡奪が頓挫した条件の一つのは、後小松上皇・称光天皇が関東と連携しえたことにある（平山「二〇〇五a」「二〇〇六b」を参照）。